黄檗宗松尾寺の歴史と美術

滋賀県の最高峰・伊吹山は新市「米原市」のシンボルです。古代より信仰の山として栄え、山中には伊吹山四カ寺を中心に、多くの寺院が建立されました。

年を経て、ほとんどの寺が衰退して、わずかに山麓に塔頭（たっちゅう）やお堂を残すのみとなりました。その中で、現在でも元の位置にあるのが松尾寺です。

松尾寺は、白鳳年間(674)に天武天皇の勅願によって、松尾童子が開基したと伝えられています。もとは法相宗（ほっそうしゅう）でした。松尾寺も伊吹山寺の一寺院と考えられ、伊夫岐（いぶき）神社の記録には、天文５年(1536)、松尾寺に所属する寺院として27の坊名があり、現在地の小高野（おだかの）（二合目）に多くの小寺院が集まっていたことがわかりますが、戦国時代の戦乱に巻き込まれて焼失してしまいました。

江戸時代、貞享年間(1684～1688)に、黄檗宗（おうばくしゅう）の僧である秀水が伊吹山にきて、彦根藩家老西郷氏や沢村氏の浄財によって、山麓の松尾に本堂・禅堂を建立して、松尾寺を再建しました。

その後、数多くの弟子が禅学を追求する出世道場となり、各地の黄檗寺院に人材を送り込む学問の場所となりました。幕末の農村革命者・大原幽学（ゆうがく）も３年間ここで修行しています。

戦後、経済的なよりどころをうしなって荒廃していましたが、昭和42年、地元上野区民の熱意で、もとの小高野に再建され、現在にいたっています。

日本の黄檗宗は、承応３年(1654)に中国から来日した隠元（いんげん）禅師が、将軍家綱と謁見して宇治の地を与えられ、黄檗山萬福寺を建立して開宗したのが始まりです。黄檗宗では師の教えを受け継ぐことが重んじられました。松尾寺には、多くの肖像画（頂相（ちんそう））や書跡が伝わっています。これらは、師から弟子への伝法のしるしとして与えられたもので、歴代の住職にとっては最も重要なものでした。学問所として、また、修行の場としての重要な役割をもっていた「松尾寺」を示す良好な資料です。（髙橋順之）

▲隠元像（松尾寺所蔵）

情報ＢＯＸ

◆伊吹山文化資料館では、今回紹介した松尾寺の宝物を展示する下記の企画展を開催します。
第51回企画展
『黄檗宗松尾寺の宝物展』　６月４日～７月18日
※肖像画や書跡など、黄檗宗の美術作品を展示します。

◆児童・生徒向け学習資料『ふるさと伊吹探訪シリーズ』11～13集を発行しました。市内の各学校や公共施設、県内の図書館に配置する予定です。
『ふるさと伊吹の化石と鉱物』（シリーズ 11）
『伊吹の野生』（シリーズ 12）
『伊吹の花・物語』（シリーズ 13）
※『広報いぶき』に連載されていたものをまとめました。Ａ５判、54～72頁、カラー刷り
◎問合せ先
伊吹山文化資料館　℡・Fax0749-58-0252

◆柏原宿歴史館では、下記の企画展を開催します。
『中川泉三　小伝』～章斎文庫の世界～
７月20日(水)～８月21日(日)
◎問合せ先　　柏原宿歴史館　℡0749-57-8020

◆◆編集後記◆◆

祝「米原市」誕生（一まいばらし一と読んでください）。坂田郡時代から、多くの皆さまにご愛読いただきました「佐加太」ですが、合併後もめでたく継続する運びとなりました。パチパチ■旧３町の文化財担当が文化スポーツ振興課に配属されましたので、これからは新市のいいところをいっぱい紹介していきます■百名山伊吹山に抱かれ、琵琶湖に臨む歴史と自然は、溢れんばかりの情報と物語の宝庫です■次号は、近江町も仲間に入った新「米原市」から、さらにパワーアップしてお届けします。お楽しみに。
（シャンギリッ子）
※なお、報告書等の発送は下記までお願いいたします。

米原市文化財ニュース
佐　加　太　第 22 号
発　行　平成 17 年 5 月 29 日
編　集　米原市教育委員会
〒521-0292　滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会文化スポーツ振興課
TEL. 0749(55)8106
印　刷　立木印刷

米原市文化財ニュース
佐加太

第 22 号
２００５年５月29日
滋　賀　県
米原市教育委員会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

米原市の誕生と、山内一豊文書の発見

滋賀県の東北部に位置する坂田郡は山東町、伊吹町、米原町、近江町という４町から構成されていました。このうち山東町、伊吹町、米原町が去る２月14日に合併し、米原市が誕生しました。これまで坂田郡文化財ニュースとして 21 号を皆様に提供してまいりましたが、今回の第 22 号よりは米原市の文化財ニュースとして続けていくこととなりました。今まで以上に皆様より親しまれる紙面作りに努力していく所存でおります。ご愛読賜りますようよろしくお願いします。

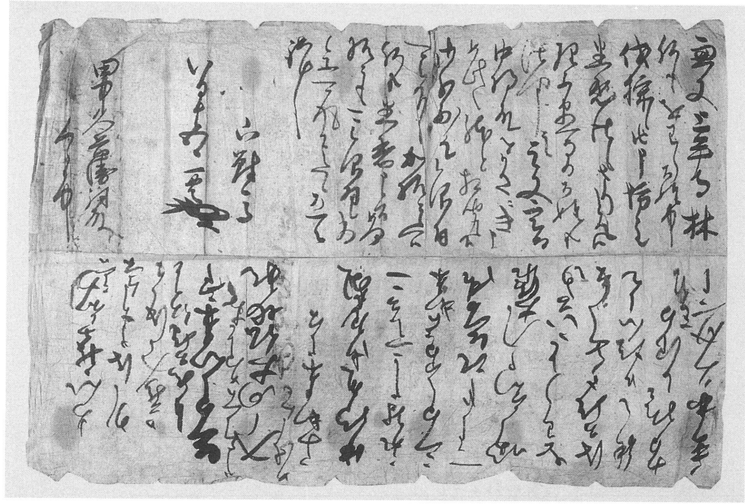
さて、米原市は歴史遺産の豊富な地域であり、中世には近江守護佐々木氏の庶流、京極氏の本拠地となり、その居館や山城が構えられるようになります。一方、南方の彦根市との境は戦国時代に江南と江北の国境となり数多くの境目の城が構えられます。このうち京極氏の本城であった上平寺城、境目の城として機能していた鎌刃城が国史跡に指定されています。

また、江戸時代には市域を中山道が横断し、北国街道が縦貫するという交通の要衝となり、中山道では番場宿、醒井宿、柏原宿が置かれていました。今後はこうした歴史遺産を「戦国しろの道」、「街道の道」などにゾーニングして、活用していく予定です。

さて、合併直後にビッグニュースが飛び込んでまいりました。米原市大清水の旧家の古文書群のなかから山内一豊の書状が発見されたのです。田中吉政に宛てたものですが、吉政が久兵衛尉と名乗っていた天正十五年(1587)に発給された文書と考えられます。その内容は大清水と大原庄の山論について、事情を聴いて適切な対応をするよう依頼したものです。また上平寺の林で大原庄の農民が木を伐採し、坊主が迷惑している様子も記されています。さらに京都方広寺の大仏建立で敷地の地固めを終えたことも報告しています。

一豊は天正十三年から十八年まで長浜城主でしたが、書状に記載された地域が八幡山城主豊臣秀次の直轄領であったため、秀次の補佐官であった吉政に経緯を伝えたもののようです。

これまで一豊の文書については天正十八年以降の掛川城主時代の文書しか現存しておらず、今回発見された文書は最古のものとなりました。まるで来年のＮＨＫの大河ドラマ「功名が辻」に合わせたような発見に驚いています。なお、この文書は米原市伊吹山文化資料館にて７月５日(火)より７月24日(日)まで展示されます。また、長浜市立長浜城歴史博物館でも企画展「田中吉政とその時代展」で９月10日（土）より10月16日(日)まで展示されます。ぜひ、ご覧ください。　（中井　均）



▲大清水で発見された山内一豊の書状

特別寄稿

上平寺城・山岳寺院論の提唱

滋賀県立琵琶湖博物館　用田政晴

1　上平寺城

上平寺城は京極氏の山城で、伊吹山から南に延びる刈安尾と呼ぶ尾根の先端にその遺構が残っています。

城があった時代には「かりやす城」「かりやす尾城」と呼ばれ、近世の地誌で初めて「上平寺城」という名前が登場してきます。

この城は、内紛の続いていた京極家を収めた京極高清が、京極家の惣領として永正2年（1505年）ごろに築いたものといわれ、元亀元年（1570年）の改修の直後には廃城となったようです。

2　城の構造

詳細な測量調査の報告書はすでに刊行され、本誌第17号でも髙橋順之さんがその概要を紹介しています。

標高669mの頂部に南北約50m・東西約35mの主郭を置き、その南下方に向かって伸びる道を挟んでその他の曲輪が直線的に続いています。曲輪の間には堀切や竪堀が配置され、いくつかの曲輪の周囲には土塁がめぐっています。

3　山岳寺院論

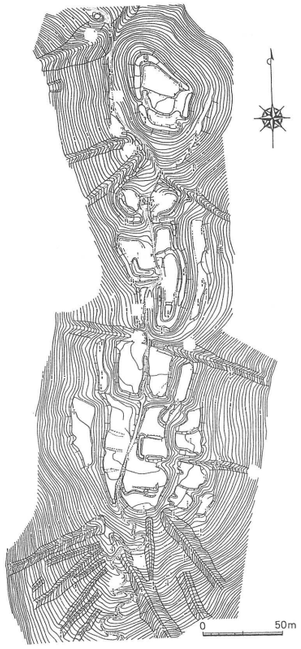
この上平寺城が元の上平寺という寺であったと、地元の福永圓澄さんは以前からおっしゃっていました。しかし、2002年10月に開催された『京極氏の城・館・庭園』シンポジウムの議論などでは、寺院の痕跡を見つけるのは非常に困難であるとされるなど、これまでは守護大名の山城と麓の居館としてのみ評価されてきました。

筆者は、この数年、伊吹山を中心としたいくつかの山岳寺院を歩いて、その構造や歴史的展開を整理する中で、上平寺城は典型的な山岳寺院を中世後期段階で城郭に改変したものであると考えました。しかもその麓に広がる上平寺館跡についても、山上の寺院をそのまま移した痕跡であると考えるに至りました。

4　寺院の諸要素

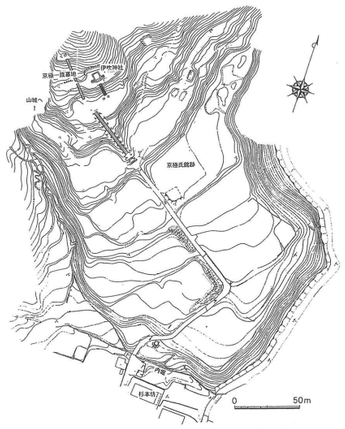
標高669mの頂部に、他と隔絶した規模で2段からなる中心的郭があり、奥の北半部分が本堂の基壇状を呈しています。それを頂点として、南に向かって小規模な郭が規則的に展開します。これらの郭の真ん中を直線的に走る南北の独立した道があり、この左右に8つの郭が展開します。弥高寺の在り方と基本は同じで、典型的な中世前期の山岳寺院としての形式であり、土塁や堀切は後の城郭関連施設と考えられます。

また、これらの山岳寺院をそのまま麓におろしたのが、京極氏館跡を中心とした地域です。すなわち伊吹神社を頂点として南に向かう直線道路と左右の規則的な8つの区画。頂点の伊吹神社は2段に分かれ、神社から見て右後方に墓地を備えるなど、山を下りた山岳寺院の姿をとどめています。この寺院を後に京極氏が居館として利用し、山上は詰めの城として「桐が城」と称したのです。



▲上平寺城跡測量図

（参考文献）
髙橋順之『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ
上平寺城跡－京極氏の山城跡－』
伊吹町教育委員会　2002年
髙橋順之「放射状の竪堀群を確認－上平寺（桐ヶ城）跡－」
『佐加太』第17号　2002年



▲上平寺館跡平面図

みち・ひと・まち

山東町・伊吹町・米原町が合併して誕生した「米原市」。西は琵琶湖に接し、東は霊峰・伊吹山を望み、湖の文化と山の文化を合わせ持つまちが生まれました。米原市は、古代より交通の要であり、また近江の東の玄関口として多くの文化が育まれ、絶えず歴史の表舞台に立って来ました。

古代では、大和朝廷の伝説のスーパースター“日本武尊”と伊吹山の神々との戦いを伝える「日本武尊伝説」。天智天皇亡き後の皇位継承を巡って戦場と化した古代最大の内乱「壬申の乱」。中世では、“近江を制する者は天下を制す”といわれ、信長・秀吉・家康を始めとした多くの武将がこの地を駆け巡り、その戦いの中で鎌刃城・上平寺城や長比城などの城が築かれました。近世に入り、古代より畿内と東国を結ぶ最も重要な道であった“東山道”が「中山(仙)道」と改められ、柏原・醒井・番場に宿場が置かれました。北国街道には米原宿、北国脇往還には藤川宿・春照宿が整備され、各宿場とも大いに賑わったということです。

現在は、周辺の風景の中で往時の面影を残しつつ、各時代の建物が建ち並び今を生きる人たちの息吹きが感じられる佇まいとなっています。

米原市という小さなまちですが、幾筋もの街道と多くの宿場という歴史の「息吹き」と、伊吹山を始めとした自然の「息吹き」、そこに住む住民の「息吹き」を活かしながらまちづくりを進めていきたいですね。

（桂田峰男）

中世の城跡を活かす

今回のテーマは各担当ごとにお気に入りの文化財を紹介するということで、私は米原市内の中世城跡とそれを活用している地域の取組みについて申し上げたいと思います。

一般的に「城」という言葉を耳にすると、多くの方が、安土城や彦根城や姫路城のように荘厳な石垣と華麗な天守が備わっている姿を思い浮かべるのではないでしょうか。しかし、こうしたお城の構造は織田信長が安土城を築いた頃、つまり、戦国の乱世が統一され終焉に近づいた頃より後の時代に建てられたものです。一方、それ以前の戦国時代に建てられた城とは、山の中で土を切ったり盛ったりして、建物などが建てられる平坦地を作り、その周囲に土塁や堀切といった防御施設を配したもので、「城」という文字のとおり、「土」から「成」るものでした。こういう城を「中世城跡」と言います。

米原市内にはこうした中世城跡が数多く存在します。代表的なものでは京極氏遺跡内の上平寺城（上平寺）、鎌刃城跡（番場）、横山城跡（朝日）、太尾山城跡（米原）、八講師城跡（梓河内）等々。現地を訪れると、山中にも関わらず、平坦な土地があったり、石垣があったりと、当時の面影を偲ぶことができます。

また、米原市では、地元にある城跡を活用するための取組みも盛んに行われています。特に毎年11月23日には、市内の城跡保存団体が中心となって県内の関係諸団体に呼びかけ、各城跡で順番にのろしを打ち上げて琵琶湖を一周する「琵琶湖一周のろし駅伝」が現地見学会と並行して実施されています。

永い年月を経て残ってきた文化財と、それを山中に埋めたままにしておくのではなく活かしていこうという地域の思い。これらはまさに米原市の財（タカラ）だと思います。

（高畑光昭）

▲のろし駅伝のようす（弥高寺跡）